

## 「月島調査」データの2次分析 —駄菓子屋の社会地図と権田保之助の民衆娯楽研究—

Secondary Analysis of Qualitative Data : Rethinking  
the Social Maps of 'Tsukishima Research'

武 田 尚 子\*

Naoko TAKEDA\*

**要約** : 本稿は、1918～20年に実施された内務省衛生局「月島調査」のデータを用いて、質的調査データの2次的利用・2次分析の方法を検討する。また、「月島調査」データに、「未発表データ・資料」があることと、その「未発表データ・資料」の内容も紹介する。

本稿で、2次分析の対象として利用するのは、「月島社会地図 第21図 駄菓子屋、ミルクホール分布図」である。これを歴史的・一次史料として活用する。この社会地図を作成したのは、調査員の一人であった権田保之助という人物である。日本の民衆娯楽研究の草分けといわれる人物で、のちに映画研究の第一人者となり、戦後はNHK理事もつとめた。本稿では、第21図を用いながら、民衆娯楽研究を得意としていた権田によって、月島の空間構造・社会構造のどのような側面が明らかにされたのか、また逆に権田に欠けていた視点とは何かについて考察する。

権田に欠落していた視点は、のちの権田の娯楽研究の性格と通底している。また、日本における旧中間層の研究の特徴と共通する点を見出すことができる。本稿の第21図の2次的利用の実例によって、日本における中間層研究を再考し、日本の近現代の社会科学分野における労働者生活研究の分析視角を見直すことにもつながる。質的調査データの2次的利用・2次分析は多様な可能性をふくんでいることが理解できるであろう。

キーワード : 2次分析, 月島調査, 労働者, 娯楽研究, 中間層

### 1. 質的調査データの2次分析

本稿は、1918～20年に実施された内務省衛生局「月島調査」のデータを用いて2次的利用・2次分析の方法を検討する。日本では、質的調査デー

---

\* 武蔵大学教授

タの2次的利用・2次分析を調査方法の1つとして明確に意識して、分析した事例はほとんどない。筆者は英国の質的調査データを用いた2次分析を試みているが<sup>1)</sup>、本稿は日本のデータを用いて2次分析を行い、調査方法の国際比較をするための準備としたい。

英国では、質的調査データの2次的利用・2次分析の方法として、おもに6つの手法があるといわれている「Corti, Thompson 2007」。コルティによる6つの分類は以下のようなものである。活用されるデータをオリジナル調査データ、収集した主体をオリジナル調査者または1次分析者と表記する。オリジナル調査データを2次的に活用する主体を2次的利用者または2次分析者と表記する。

第1は、オリジナル調査データに記述されている内容そのものを、歴史的一次史料とみて、その内容を2次分析者の視点で再分析・解釈していく手法である。このタイプは、応用範囲がひろく、さまざまな活用のしかたが可能である。

第2は、比較研究の素材として活用する手法である。この場合、2次分析者は自分の調査データを準備することになる。オリジナル調査データと、2次分析者の調査データが、うまく比較対照できるように設定する必要がある。

第3は、1次分析者が調査・分析していた時期には、まだ登場していなかった新しい概念や視点で、オリジナル調査データを再解釈する手法である。この場合は、1次分析者とは異なる分析の切れ味をみせて、データの意義をどのように再評価するのかが腕のみせどころとなる。

第4は、オリジナル調査データの調査設計、調査方法を再検討することである。検討の対象となるのは、調査計画、データ収集方法、調査倫理など、多岐にわたる。調査方法は調査内容と連動しているので、再検討は1次分析の意義を再考することになる。

第5は、オリジナル調査データを厳密に検証し、1次分析の妥当性を検討することである。質的調査に問われる厳密さは、計量調査で問われる厳

密さとは違う。計量調査の厳密さで、質的調査データを批判しても意味がない。質的調査の意義とは何か、どのような方法が質的調査の特性を生かせるのか、そこに必要な厳密さとは何かを熟考することになる。

第6は、オリジナル調査データを、教育目的で利用することである。学生への指導、授業の素材として使う。トランスクリプトなど実際のデータ・諸資料をみることによって、若い研究者は質的調査とはいかなるものかを理解できる。若い研究者の研究意欲や研究姿勢の育成に有益である。

本稿は、「月島調査」のオリジナル調査データを、上記の1および4の方法で活用することを試みる。2次分析の対象として利用するのは、「月島社会地図 第21図 駄菓子屋、ミルクホール分布図」である。これを歴史的な一次史料として活用する。この社会地図を作成したのは、調査員の一人であった権田保之助という人物である。日本の民衆娯楽研究の草分けといわれる人物で、のちに映画研究の第一人者となり、戦後はNHK理事もつとめた。本稿では、「駄菓子屋、ミルクホール分布図」を用いながら、民衆娯楽研究を得意としていた権田によって、月島の空間構造・社会構造のどのような側面が明らかにされたのか、また逆に権田に欠けていた視点とは何かについて考察してみたい。

権田に欠落していた視点は、のちの権田の娯楽研究の性格と通底している。権田の娯楽研究の特徴をたどりながら、権田の研究視角の特徴を明らかにする。すこし先取りして述べるならば、それは日本における旧中間層の研究の特徴と共通する点を見出すことができる。「駄菓子屋、ミルクホール分布図」を切り口として、権田の娯楽研究の特徴を明らかにすることは、旧中間層の形成・変容過程の研究に貢献する点があると思われる。「月島調査」データの2次的利用・2次分析によって、「月島調査」の調査視角の特徴をあらいだし、旧中間層再考に資するものは何かを考えてみたい。

なお、本稿作成にあたっては、「月島調査」データだけではなく、筆者自身の調査データも用いている。2006年11月～2007年1月に、東京都中央区月島1・3丁目のもんじゃ屋女性経営者15名にインタビュー調査を実施

した。2次分析者のデータと組み合わせているという点では、上記の2次分析方法の第2の手法も兼ねそなえている。

## 2. 「月島調査」の評価

「月島調査」は、1918年10月、内務省保健衛生調査会第七部に、同部会の委員であった高野岩三郎(1918年当時は東京帝国大学法科大学教授)が、都市衛生状態の实地調査の議案を提出したことに始まる。同部会の承認を得て、1918年11月に調査開始、月島には調査事務所が設置され、1920年秋まで調査が実施された。

調査結果は、1921年5月に内務省衛生局から『東京市京橋区月島に於ける实地調査報告 第一輯』として刊行された。三冊構成になっており、第一冊は、報告本文、月島及付近地図1枚、月島の写真11枚である。第二冊は『附録一』で、統計表106種合計194表、統計49種50表が掲載されている。第三冊は『附録二』で、月島社会地図27図、写真90枚が掲載されている。

「月島調査」以前にも、都市の実態を描いた記録、探訪記<sup>2)</sup>は存在した。しかし、それらは本格的な工業化がはじまる以前のものであった。そこに記録されたのは、不熟練労働者などの「下層社会」の都市「細民」であった。第一次大戦期に入り、1910年代に日本の重工業は急速に進展しはじめた。本格的な生産体制が形成され、工場労働者数は増加し、都市部に工業人口が集中しはじめた。重工業生産体制の中核を担う熟練労働者の動向が日本社会の趨勢に影響することが実感される時代となった。高野岩三郎は、かねてより熟練労働者の労働問題、生活問題に関心をもち、本格的な都市の地域生活調査の必要性を感じていた。最初に予定されていた調査地は、月島ではなく、東京市本所区柳橋横川町であった。調べはじめてみると、意外にも熟練職工の数が少なかったため、すぐに京橋区月島に調査地が変更された。石川島造船所をはじめとする大工場が複数あって、熟練労働者

働者の家族が多く居住していたことが、月島が選択された理由であった。月島は1910年代後半には東京市のなかでも工場労働者が集積した特異な地域となっていたのである。

このような経過で実施された「月島調査」に対して、都市の地域社会調査・地域生活調査の先駆という評価がほぼ定まっている〔関谷1970〕〔川合1981, 2004〕〔佐藤1996〕。高野が「月島調査」以前に、職工家計調査を実施していることから、「月島調査」を労働者家計調査の礎石として位置づける見解もある。しかし、関谷は職工家計調査の規模を拡大した労働者家計調査ととらえるのは当を得ておらず、労働者生活の総合調査としてとらえるべきであると述べている〔関谷1970: 9〕。

「月島調査」が先駆的であった点の1つとして、調査方法に写真撮影、社会地図作成、統計処理など、当時としては斬新な手法が意欲的にとりいれられたことがあげられる。これは、「月島の真相を穿つべく最善の努力を尽」くし、「事実を明白に併かも成るべく細密に現はし出」すことをめざした高野の方針によるものであった〔高野1921=1970: 47-57〕。高野は、実施した調査として、次の14をあげている。月島の社会地図作成のための実地調査、児童身体検査、労働者の身体検査、労働者家族栄養調査、長屋調査、衛生関係の職業の調査、小学校衛生調査、工場労働調査、労働者家計調査、小学校児童の家族関係・娯楽等の調査、飲食店調査、寄席の実地調査、露店調査及通行人調査、写真撮影である〔高野, 1921=1970: 47-57〕。このような「月島調査」で試された方法論的多様性に対して、マルチ・メソッドという評価もある〔佐藤1992, 1996〕。また、この時代に写真を活用した先駆性、ヴィジュアル的側面に注目した評価もある〔松尾2003〕。

このような「月島調査」の独自性、先駆性をふまえたうえで、「月島調査」の意義を最も詳細に検討している川合隆男の評価の視点を確認しておこう。川合は「月島調査」について、次のような趣旨のことを述べている。「月島調査」は1910～30年代の日本の社会調査史上の第二期（社会調査輩出・展開期、方法論生成期）における、先駆的な労働者生活調査、都市社

会調査, 社会踏査の一つである。労働者生活の総合的調査がめざされたが, 労働者と家族は統計的集合として表現されるにとどまっている。労働者の生活構造と社会関係を明らかにしていく作業は断片的で, 十分に達成されているとはいえない。労働者の自助的方法による労働問題の解決に資するという目標も曖昧なまま終わった。このような側面があるので, 戸田貞三は『社会調査』(1933)で, 高野の二十職工調査には触れたが, 月島調査については言及しなかった。それを踏襲して, 福武直も『社会調査』(1958)で, 月島調査について触れることはなかった。ここには, 「講壇の社会学」化していく戦前の日本の社会学の特徴と, 社会調査史への軽視があらわれている [川合 1981, 2004]。

「月島調査」と戸田貞三の社会学の間に断絶があるという川合の指摘が当を得ているかどうかの判断をここでは留保しておく。「月島調査」が先駆的かつ多様な調査方法を取り入れた, 都市の総合的な地域社会調査・地域生活調査であることをここでは確認しておこう。

### 3. 「月島調査」データとアーカイブス

質的調査データを2次的利用・2次分析するためには, 調査データのアーカイブスの状況が重要である。「月島調査」の場合, 調査データの一部が法政大学大原社会問題研究所に保存されている。アーカイブスは, 調査グループの性格や, 調査終了後のメンバーの状況と関連している。まずは「月島調査」グループの構成について確認しておこう。

#### 3-1 調査グループの構成とアーカイブス

1918~20年にかけて実施された「月島調査」の統括・指導にあたったのは, 高野岩三郎であるが, 実地調査を担当したのは, 内務省囑託として調査に参加した権田保之助, 星野鉄男, 山名義鶴である。他にも調査補助的関わり方をした者が数名いる。

1921年5月に内務省衛生局から刊行された『東京市京橋区月島に於ける実地調査報告 第一輯』では、「第一編 総説」は高野，他三編は，調査担当者が報告書本文を書いている。「第二編 月島と其の労働者生活」は権田，「第三編 月島に於ける労働者の衛生状態」は星野，「第四編 月島の労働事情」は山名である。

高野は調査期間中，東京帝国大学法科大学教授から東京帝国大学経済学部教授へと職位を替え，1920年には東京帝国大学を退職し，大原社会問題研究所所長に就任した。「月島調査」終了後，権田保之助も大原社会問題研究所所員となった。そのため，「月島調査」データの一部は大原社会問題研究所に收藏された。

高野は「月島調査」の実施担当者とデータの收藏について，次のように記している。

「権田保之助君が「本邦家計調査」に於て我國に行はれたる近時の家計調査を列挙し，且其の重なる結果を示されたのは，確かに読者諸君の満足を買ふ所と信ずる。只同君が東京職工二十家族の家計調査と内務省の所謂月島調査に関して筆者に与へられたる賛辞は過当に失して到底筆者の甘受し能はざるものである。（中略）若し夫れ後者に至つては権田・山名・星野・後藤の諸君，殊に権田及後藤両君の力に負ふ所殆ど全部である。前者の原資料は東京帝國大學の經濟統計研究室内に保存されて居たが，開東大震災のため灰燼歸したるは惜しみても尚余りある。之に反して月島調査の資料が大原社會問題研究所に保管されてあるのは，筆者等關係者の窃に幸とする所である。」〔高野編 1933：727-728〕

高野は権田保之助の功績が大きかったと述べている。権田が執筆担当であった「第二編 月島と其の労働者生活」のなかでも，とくに「第十五章 労働者と娯楽」，「第十六章 労働者儿女と生活」の二章は，高野が権田に調査方法の設計をかなりゆだねたと推測される部分である（後述）〔寺出 1982：181〕。

以上のように，高野，権田という「月島調査」の中核は，調査終了後，

大原社会問題研究所に研究拠点を移していった。このような経緯で、法政大学大原社会問題研究所に調査データの一部が残っている。

### 3-2 「未発表データ・資料」の活用例

大原社会問題研究所に収蔵されている「月島調査」のデータ・資料の一部は目録に掲載されている。しかし、収蔵されているデータ・資料のなかには、未整理で目録に非掲載のものも相当数ふくまれている(写真1)。これらの収蔵データ・資料(目録に掲載・非掲載のもの両方をふくむ)を、「月島調査」オリジナル調査データ・資料と表記する。

このなかには、1921年内務省衛生局『東京市京橋区月島に於ける実地調査報告 第一輯』にその内容が掲載されているものと、掲載されていないものがふくまれている。すでに公刊本に内容が掲載されているものを「既発表データ・資料」と表記する。また、公刊本には掲載されていないものを「未発表データ・資料」と表記する。

大原社会問題研究所に現存している「月島調査」オリジナル調査データ・資料には、次のようなものがふくまれている。社会地図(写真2)、月



写真 1

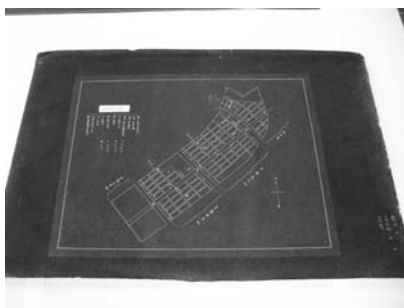


写真 2





写真 3

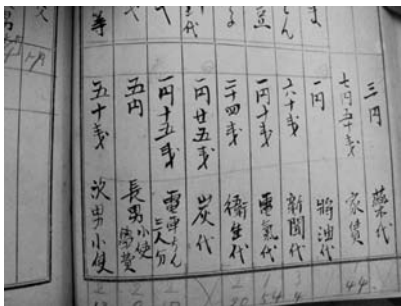


写真 4



写真 5



写真 6

島社会調査写真（公刊本に掲載・非掲載両方をふくむ）、労働者家計調査家計簿（40冊）（写真3, 4）、家計調査原票（労働者40世帯分）（写真5）、写真撮影箇所控（178葉分）、月島関係統計資料、高野岩三郎日記（1918～1940＝42冊）（写真6）などである。

「未発表データ・資料」を活用すると、どのようなことがわかるだろうか。活用例を紹介しよう。たとえば、表1は労働者家計調査家計簿に基づいて作成したものである。有志の労働者世帯に、1年または半年間、毎日常

表 1 月島調査 労働者家計 調査対象者の状況  
1919年(大正8年)6月30日現在

収入による四分類※	世帯主		1ヶ月平均収入・支出		同居者の構成		居住地区	家計簿調査番号		
	年齢	勤務先	職種	収入(円)	支出(円)	同居人数			世帯主と配偶者以外の同居者(世帯主との続柄)	同居者の職業先
I	32	自営	鍛冶職	172,397	135,148	8	実子3・従兄1・弟子2	従兄＝旋盤師、弟子2＝鍛冶職	月島通	6
	38	服部製作所	職工	128,844	106,991	5	実子3		東仲通	15
	29	石川島造船所	職工	108,244	113,314	4	実子1・弟1	弟＝石川島造船所職工	佃	18
	29	東京紙器製造会社	職工	106,982	86,010	7	実子2、母、弟1、妹1	弟＝月島下谷バルブ製作所職工	月島通	11
	42	新潟鉄工所	職工	106,310	119,555	4	実子2		東仲通	32
	30	石川島造船所	仕上工	103,983	127,130	6	実子2・妻の父、妹1	妻の父＝石川島造船所仕上工	新佃	8
	37	自営	機械職	100,000	93,480	5	実子3		月島通	29
	29	稲垣鉄工所	職工	90,075	96,738	4	実子2		東仲通	23
II	32	未記入	鍛工職	88,270	61,803	4	異父弟1・従弟1	異父弟＝気缶取扱、従弟＝製鋼職工	新湊町	10
	32	月島鉄工所	仕上工	86,720	69,250	2	なし		西仲通	35
	41	石川島造船所	仕上工	85,660	68,490	6	実子4		月島通	30
	35	石川島造船所	職工	85,600	43,910	2	なし		佃	34
	37	稲垣鉄工所	職工	83,370	110,160	6	実子4		新佃	27
	35	石川島造船所	職工	80,650	98,465	4	実子1・父		西仲通	33
	41	新潟鉄工所	機械部	79,283	74,827	5	実子3		東仲通	3
	39	阿知波鉄工所	職工	78,000	97,228	5	実子3		新佃	25
	40	石川島造船所	職工	76,427	64,903	6	実子4		新佃	5
	35	新潟鉄工所	旋盤工	73,535	53,651	3	親類の子(学生)1		西仲通	2
	31	未記入	ペンキ職工	71,726	68,438	4	実子2		新佃	4
III	36	石川島造船所	旋盤工	68,623	74,637	7	実子5		西仲通	40
	33	日本機械製作所	職工	67,655	58,518	6	実子3・弟1		東仲通	20
	31	碌々商店製作部	職工	67,483	59,585	5	実子3		西仲通	21
	25	日本機械製作所	職工	66,880	74,398	4	実子2		東仲通	22
	33	石川島造船所	職工	64,120	72,120	3	養子1		東仲通	13
	36	海軍造船廠	職工	62,613	65,768	4	実子2		東仲通	1
	32	月島鉄工所	旋盤工	61,665	59,963	4	実子2		月島通	28
	36	石川島造船所	職工	60,925	78,977	4	実子2		月島通	39
	30	日本機械製作所	旋盤工	59,540	60,896	3	実子1		月島西河岸	9
	31	石川島造船所	職工	57,340	73,903	3	実子1		東仲通	24
	27	石川島造船所	職工	56,447	38,790	2	なし		未記入	38
	30	日本機械製作所	職工	55,573	48,238	3	母		東仲通	14
	29	稲垣鉄工所	職工	52,230	49,343	3	実子1		東仲通	12
	26	日本機械製作所	職工	51,947	51,945	3	母		東仲通	37
IV	27	石川島造船所	仕上工	46,498	56,985	4	実子1、母		西仲通	16
	38	日本機械製作所	職工	45,065	65,416	2	なし		東仲通	36
	31	未記入	鍛冶職	42,090	43,010	2	なし		月島通	31
	25	石川島造船所	職工	39,323	38,743	2	なし		越前堀	17
	26	新潟鉄工所	職工	36,535	42,697	3	実子1		新佃	7
	27	石川島造船所	職工	32,042	40,344	2	なし		佃	19
	38	精米会社	職工	31,250	46,883	7	実子5		新佃	26

※対象となった40世帯は、すべて婚姻関係を結んだ夫・妻から構成される世帯。夫が所帯主として表記されている(本書では世帯主として表記)。

※収入による四分類は、『生活古典叢書第6巻 月島調査』光生館, 1970:118-119による。

※同居人数には世帯主を含む。

※出典:1ヶ月平均収入・支出-内務省衛生局,『東京市京橋区月島に於ける実地調査報告第一輯』(『生活古典叢書第6巻 月島調査』光生館, 1970):130-131。 それ以外-月島調査原資料(大原社会問題研究所蔵)

※平均収入より平均支出が上回る、赤字家計の世帯の不足金補填の方法については、『月島調査』光生館:131。

表 2 月島調査 労働者家計 石川島造船所勤務者  
1919年(大正8年)6月30日現在

収入による四分類※	世帯主		職種	1ヶ月平均収入・支出		同居人数	同居者の構成		居住地区	家計簿調査番号
	年齢	勤務先		収入(円)	支出(円)		世帯主と配偶者以外の同居者(世帯主との続柄)	同居者の就業先		
I	29	石川島造船所	職工	108,244	113,314	4	実子1・弟1	弟=石川島造船所職工	佃	18
	30	石川島造船所	仕上工	103,983	127,130	6	実子2・妻の父、妹1	妻の父=石川島造船所仕上工	新佃	8
II	41	石川島造船所	仕上工	85,660	68,490	6	実子4		月島通	30
	35	石川島造船所	職工	85,600	43,910	2	なし		佃	34
	35	石川島造船所	職工	80,650	98,465	4	実子1・父		西仲通	33
	40	石川島造船所	職工	76,427	64,903	6	実子4		新佃	5
III	36	石川島造船所	旋盤工	68,623	74,637	7	実子5		西仲通	40
	33	石川島造船所	職工	64,120	72,120	3	養子1		東仲通	13
	36	石川島造船所	職工	60,925	78,977	4	実子2		月島通	39
	31	石川島造船所	職工	57,340	73,903	3	実子1		東仲通	24
	27	石川島造船所	職工	56,447	38,790	2	なし		未記入	38
IV	27	石川島造船所	仕上工	46,498	56,985	4	実子1、母		西仲通	16
	25	石川島造船所	職工	39,323	38,743	2	なし		越前堀	17
	27	石川島造船所	職工	32,042	40,344	2	なし		佃	19

出典:図表Iに同じ。

計簿をつけることを依頼し、支出・収入項目、金額のデータを集めたものである。「既発表データ・資料」には、調査者の属性をふせた家計状況や収入分類が記載されている<sup>3)</sup>。しかし、「未発表データ・資料」を併用すると、勤務先、職種、同居者構成、家族内就業者数などの属性が明らかとなり、より詳細な労働者像が明らかとなる。世帯主は、すべて男性工場労働者、20～40代で、定職・定収入がある人々である。製造業自営業主が2家族ふくまれている。収入四分類(『月島調査報告』にもとづく)の最上位I類に入っている8家族は、自営業主か、複数の就業者を擁した家族である。製造業自営業主として独立したほうが有利であったことがわかる。

表2は、ここからさらに石川島造船所の勤務者だけを取り出したものである。II類の労働者の年齢は、30代半ば以上である。それに対して、IV類は20代の労働者である。40歳前後の熟練労働者の収入は、20代の労働者の約2倍である。同じ会社の工場に勤務していても、労働者の賃金格差は、意外に大きい。石川島造船所勤務者の最年少である25歳の職員の1918年2月～3月の勤務時間がわかる(表3)。14時間におよぶ長時間勤務の日や、徹夜勤務の日がかなり多い。安定した大工場に勤務しているとはいえ、厳しい労働である。

表3 石川島造船所職工 出勤・退勤時刻(1918年2月16日～3月30日)  
※家計簿調査番号17の職工=25歳、家族構成は夫婦2人。

月	日	曜日	出勤時刻	退勤時刻	月	日	曜日	出勤時刻	退勤時刻	月	日	曜日	出勤時刻	退勤時刻		
2	16	日	7:00	17:00	3	1	土	6:30	17:00	3	16	日	6:30	徹夜		
	17	月	7:00	21:00		2	日	工休				17	月	私休		
	18	火	7:00	21:00		3	月	私休				18	火	6:30	徹夜	
	19	水	7:00	21:00		4	火	私休				19	水	6:30	17:00	
	20	木	7:00	21:00		5	水	6:30	21:00			20	木	私休		
	21	金	7:00	17:00		6	木	6:30	徹夜			21	金	6:30	17:00	
	22	土	7:00	21:00		7	金	私休				22	土	6:30	徹夜	
	23	日	7:00	17:00		8	土	6:30	21:00			23	日	私休		
	24	月	7:00	17:00		9	日	6:30	17:00			24	月	私休		
	25	火	7:00	21:00		10	月	6:30	21:00			25	火	私休		
	26	水	7:00	17:00		11	火	6:30	21:00			26	水	私休		
	27	木	7:00	21:00		12	水	6:30	17:00			27	木	6:30	17:00	
	28	金	7:00	17:00		13	木	私休				28	金	6:30	17:00	
						14	金	6:30	21:00			29	土	6:30	徹夜	
				15		土	6:30	21:00		30	日	工休				

出典:「月島調査」-「未発表データ・資料」(法政大学大原社会問題研究所所蔵)より筆者作成。

## 表 4 月島調査資料 家計簿：労働者家計第 30 号 1918 年 2 月の支出内容 (1918 年 2 月 1 日～2 月 28 日)

同居家族6名(実子4名。うち3名は就学中)。  
 ※2月15日 給金(半月分):夫25円86銭、妻 内職賃5円  
 ※2月28日 給金(半月分):夫25円95銭、妻 内職賃5円  
 ※家賃:17月 5円

日付	購入品目(原文表記のまま)	( )内は購入金額、原則として単位は銭	その他	掛け買い
1	食品			
1	精白米(9円65)	煮豆(3)、カレー粉(15)、茶菓子(5)	小瓶(15)、一月分新聞代(32)、湯銭3人分(11)、被3枚・着13パ(7円)、煙草(40)、小包装(28)	茶(25)
2	煮豆(3)、あげ二枚(6)、ワナ粉(20)、片栗(15)、きりぼし(7)		小瓶(11)、菓(12)	味噌(10)
3	かねい、二か(10)、まきみ(5)、茶菓子(10)、菓子(3)		小瓶(12)、湯銭6人分(11)、ひご1ツ(5)、さかき(5)、ほご1花(0)	
4	納豆(5)、いも(10)、めさし57ツ、佃煮(10)、にんじん(4)		小瓶(14)	味噌(10)、塩(5)
5	乾唐辛1帖(10)、大根(5)、かぶ(3)		小瓶(14)	砂糖(18)
6	豆腐2丁(8)、あげ二枚(6)、かんかんどき(6)、ちくわ2本(12)、そばこ(10)		小瓶(14)、洗濯石鹸(5)	
7	あげ二枚(6)、佃煮(6)、小松菜2丁(4)		小瓶(15)、浅草紙(10)	
8	白米(5円)、ちくわ2本(12)、きりぼし(8)		小瓶(10)	味噌(10)、塩(5)
9	豆腐3丁(13)、そんどう豆(3)、さぼつ1合(10)		小瓶(15)、湯銭3人分(11)、カラス1枚(40)、ひご1ツ(4)	
10	ちくわ(10)、どろいも(15)、鰯節1本(10)、こぶ(3)、けんちん巻(20)、かぶ2ツ(14)		小瓶(13)	塩(5)
11	豆腐1丁(4)、おひけ(3)、ちくわ2本(12)、たくわん1本(10)、大福(10)		小瓶(15)、湯銭5人分(17)、浅草紙(5)	味噌(10)
12	豆腐2ツ(8)、しやけ2ツ(10)、わかめ(3)		小瓶(14)	塩(10)、白酒(38)
13	たら4ツ(20)、佃煮(4)、森永キレマ(4)		小瓶(13)、煙草(使物)(50)	砂糖(11)
14	豆腐1丁(4)、ちくわ2本(12)、佃煮(5)、大根1本(50)		小瓶(10)、所主ノ小瓶(1円)、学校月謝3人分(1円40)、酒屋掛代(1元)、かち上げ(28)	味噌(10)、さどろ酒(50)、白酒(使物)(45)
15	白米(9円66)、里芋4合(20)、海苔1帖(15)、天ぷら(30)		小瓶(10)、下駄購入(23)	
16	煮豆(8)、しやけ2ツ(10)、こは2ツ(10)、おんご1ツ(6)、たくわん(10)		小瓶(13)、ひご1ツ(5)、安妻結賃(20)、椿油(10)、電車賃(30)	味噌(10)
17	煮豆(3)、たら4ツ(20)、大根1本(5)		小瓶(12)	入折菓子(1円)
18	たくわん1本(10)、天ぷら(10)		小瓶(13)、佃煮(30)、家賃二月分(5円)	
19	煮豆(7)、いかに(2丁)、海苔1帖(10)		小瓶(14)	
20	めさし57ツ(12)、ほうれんご53ツ(12)、		小瓶(12)、湯銭4人分(19)、子供供養料(32)、ひご1ツ(5)、花王石鹸(12)	
21	白米(4円)、芋130、やつかし5(20)、牛肉(20)、茶菓子(10)		小瓶(13)、洗濯石鹸1ツ(5)	
22	煮豆(8)、いかに57ツ(10)		小瓶(16)、洗濯石鹸2ツ(10)	
23	カレー1帖(20)、茶菓子(10)		小瓶(12)	
24	煮豆(3)、豆腐1ツ(4)、かかれい1匹(18)		小瓶(13)、湯銭3人分(11)	
25	煮豆(3)、豆腐1ツ(4)、かかれい1匹(18)		小瓶(12)、草刈足(24)、浅草紙(5)、みがき粉1箇(2)	
26	納豆2ツ(7)、あげ2枚(6)、しやけ1枚(5)、うどん3ツ(15)、小松菜(5)		小瓶(13)、湯銭3人分(11)	
27	煮豆(3)、納豆1ツ(5)、たら2ツ(5)			
28	煮豆(4)、豆腐(4)、里芋1合(12)、しやけ(6)、大根1本(6)、にんじん2本(5)、たくわん1本(8)、菓子(10)			

出典:「月島調査」一未発表データ・資料(法政大学大原社会問題研究所所蔵)より筆者作成。

表4は、Ⅱ類に分類されている家族(家計簿調査番号30)のある月の家計簿である。夫は石川島造船所勤務の41歳の仕上工、家族は6人、1918年2月の夫の収入は51円81銭、妻の内職収入は10円、1ヶ月の家賃は5円である。家賃は家計の1割弱、支出のかなりの部分を飲食費または生活必需品がしめている。弁当運搬料、衛生料、新聞代、学校月謝(3人分)、女髪結賃などにも支出している。銭湯代は数日おきに記載されているので、銭湯に行くのは1週間に1回程度だったようである。

以上のように、「未発表データ・資料」によって、オリジナルの報告書である『東京市京橋区月島に於ける実地調査報告 第一輯』の記載より、さらに詳細な労働者家族像が明らかとなる。2次的利用・2次分析として多様な活用方法の可能性がある。

#### 4. 「駄菓子屋、ミルクホール分布図」再考

##### 4-1 第21図の意義

「既発表データ・資料」ではあるが、月島社会地図の第21図「駄菓子屋、ミルクホール分布図」を用いて、2次的利用の実例を示してみよう。ミルクホールは4軒しかないので、第21図は実質的にはほぼ駄菓子屋の分布図である(図1)。

第21図からよみとれることは、月島のメインストリートである西仲通りに面したところに、駄菓子屋がほとんどないということである。大人向けの内店・露店は、メインストリートの西仲通りに集中している(図2)。しかし、駄菓子屋の分布はそれとは異なり、西仲通りに集中してはいない。駄菓子屋は路地にあった。

この第21図は、権田保之助が執筆した第二編「第15章 労働者と娯楽」、「第16章 労働者儿女と生活」に関連する社会地図である。この2つの章はとくに、高野が権田に調査方法の設計をかなりゆだねたと推測されている[寺出1982a:181]。

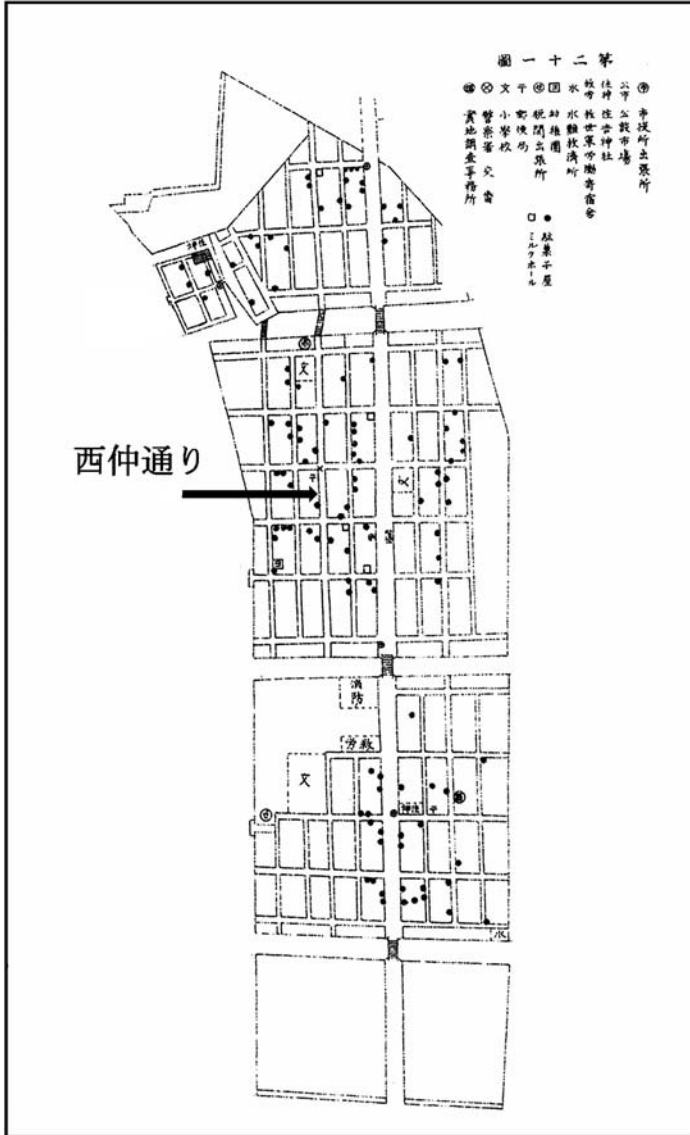


図 1

第 21 図 駄菓子屋・ミルクホール分布図

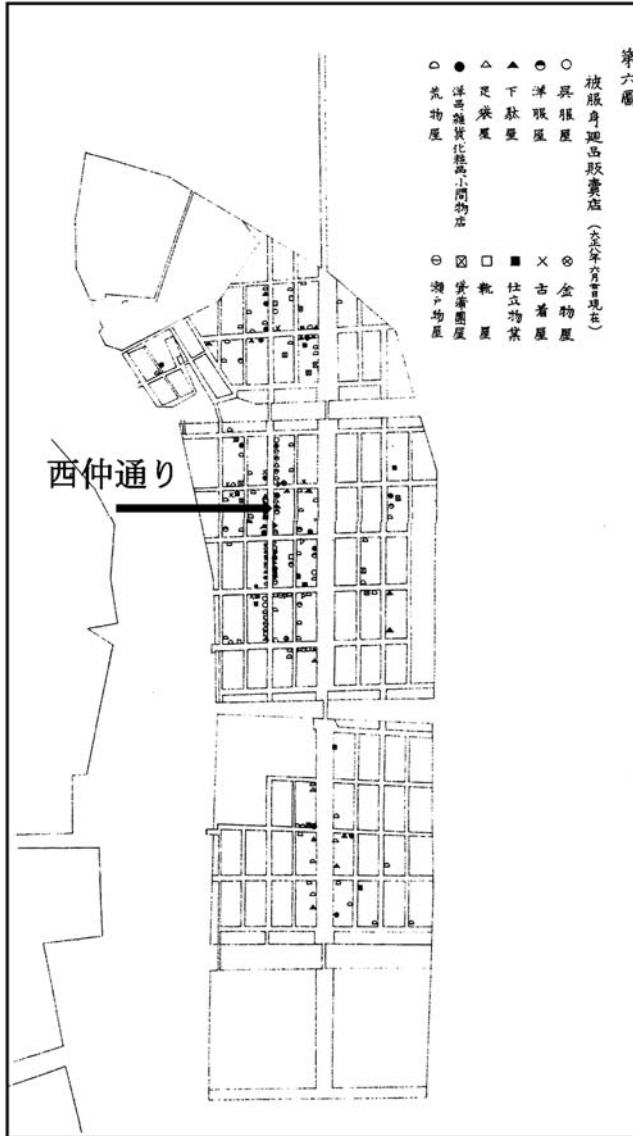


図 2

第 6 図 被服身廻品販売店分布図



権田は駄菓子屋について、月島1号地に64、新佃島に33、月島2号地に2、佃島に7、合計131あることを述べたあと、次のような内容を記している。

「今、月島全島に於ける駄菓子屋の撒を調ぶるに、(中略)兎に角かかる小地域に131の駄菓子屋があると云ふことは、寧ろ驚かる事柄ではあるまいか。(中略)実に長屋の列びある路次の入口には駄菓子屋店を開くもの多く、甚しき場合には道路の両端に、しかも各端の両側に、駄菓子屋を見ることさへあるのであって、児童はその駄菓子屋を本拠となして、其の附近にて、多数集まって遊び戯れある有様に接するのである。」(第二編 第16章 労働者儿女と生活)

さらに、月島の衛生関係の調査をした星野も、児童と虫歯という視点から駄菓子屋に関心をもち、次のように言及している。

「之が常華客は2-3歳より14-15歳までの児童と推定することが出来ると思ふ。(中略)駄菓子屋の店は極めて簡単にして二三の菓子箱あればそれで充分なる商売となるのであって長屋の一角には必ず一戸あると見て差支へない位である。」(第三編 第7章 衛生職業)

このような記述から、次のようなことが推測される。路地にある長屋の戸口で、菓子箱を2~3ならべれば開業できる、超零細資本の自営業者が路地に多数存在していた。誰が駄菓子屋を経営していたのかについては、全く言及されていない。しかし、自分の家の戸口に箱をならべて、白昼もそこにいて、子ども相手に菓子を売ることができる人、それは、つねに長屋にいる人、たぶん女性たちであったろうと推測できる。2~3歳の幼児から、14~15歳までの子どもたちが近所の駄菓子屋の前をたまり場にして、多数集まって遊んでいた。幼児も駄菓子屋に来ているというのは、弟や妹を子守し、背負いながら遊ぶ子もいたということだろう。駄菓子屋を核として「子どもの遊び場空間」が形成されていたのである。

「月島調査」の調査者たちは、駄菓子屋の特徴的な分布を的確にとらえていた。しかし、駄菓子屋の経営者については関心を示していない。駄菓子屋の数と娯楽の享受者・利用者(児童)について言及しているだけで、経

営者には関心が及んでいないのである。ここに娯楽享受者のほうを重視している調査視角の特徴をよみとることができる。

娯楽の提供者・経営者を視野にいれるならば、「駄菓子屋、ミルクホール分布図」は、路地で営業する超零細自営業者（たぶん女性）の分布を示している地図といえる。このような超零細自営業者は、子どもたち相手に小銭をかせぐ超零細経営ではあるが、月島の商業面におけるインフォーマル・セクターを構成している重要な存在であった。

#### 4-3 月島の自営業者（商業者）の三重構造

このような超零細自営業者が月島に多数存在していたことの意味を、別の側面から考えてみよう。結論から言うと、月島の商業者は、内店自営業主層、露店零細自営業者層、路地の超零細自営業者層の3重構造であったと本稿では考えている。「駄菓子屋、ミルクホール分布図」は、その超零細自営業者層の存在を実証する貴重な資料である。

1900年代前半における、メインストリート西仲通りの商業者の構造を簡潔に記述してみよう<sup>4)</sup>。月島では、1904～05年に内店ができはじめ、西仲通りが形成された。表5に示したように、1919年の「月島調査」当時には、店舗をかまえる内店の数は十分にそろっていた。

表5 西仲通りの商業 1919年6月30日

	店舗数	全島の同業店舗に占める割合(%)
飲食関係日用品商	37	17.7
保健衛生業	14	14.4
器具商	11	14.9
被服関係日用品商	40	36.7
調理飲食物商	27	30.7
娯楽業	14	35
その他	33	-
小計	176	

出典:『東京市京橋区月島に於ける実地調査報告第一輯』

一方、月島には常設の露天商もいて、夕方には西仲通りのまん中に店を出し、にぎわいを形成する重要な存在だった。埋立地だった月島では、当初は商店がなく、船で渡ってくる振売商人、露天商が不可欠の存在であった。このような経緯があるため、月島では露天商は一定の既得条件が認められた特異な存在であり続けた。新開地の月島は、他の土地よりも、露天商として参入することが容易であったのだろう。1906～1912年の数年間は月島の人口の急増期で、インフォーマル・セクターも開放的で、露天商の拡大時期であった。

露天商が増加するに従って、内店との共存は慎重に配慮しなければならぬ問題となっていった。1910年前後に、内店との共存のルールがつくられた。その結果、西仲通りには、夕方になれば、道路の中央に露店がならぶという独特の景観がみられるようになった〔京橋月島新聞社編 1940：193-211〕。このように月島の露店零細自営業者は、縁日にだけ出現する露天商とは異なり、常設の露店を出す組織化された商業者集団で、社会的に認知された存在であった。出店の環境も安定し、露店零細自営業者の同業者組織「月露睦会」は、1919年時点には80～90名で組織されていたが、1920～30年代には100～150名に増え、1933年には常設露天京橋月露商業組合に発展していった。

このように西仲通りの商業者の構造は、内店自営業主と、露天商（露店零細自営業者）の二重構造になっていた。この二重構造が、時間帯をわけて、日中と夕方では、異なる様相をみせる、二元的な構造の商業空間を作りだしていた。内店自営業主は、日中に日用品や奢侈品を購入する女性客の姿も多くみかける日常的な商業空間を生みだしていた。露店零細自営業者は、夕方から男性むけの盛り場という娯楽性のつよい空間を作り出していた。

メインストリート西仲通りには、夕方に集中的にあらわれる大人用の商業空間・娯楽空間があった。この空間の担い手は、内店自営業主層と露店零細自営業者であった。一方、長屋がならぶ路地に拡散して、日中に、駄

菓子屋の前に「子どもの遊び場空間」があらわれた。ここに介在しているのは超零細自営業者(たぶん女性)であった。子どもと女性が創る「子どもの娯楽空間」であった。新開地の月島であったけれども、商業者は三重構造になっており、異なるタイプの商業者が介在して、複合的な空間構造・時間秩序を作り出していた。

#### 4-4 調査グループの調査視角の歴史的限界

駄菓子屋の分布について、視点をかえて、経営者に着目すれば、このような月島独特の商業者の三重構造がみえてくる。しかし、「月島調査」の調査者たちは、大人用、子ども用のいずれの娯楽についても、娯楽享受者には関心を示したが、娯楽提供者である自営業者(商業者)に対しては関心を示していない。つまり、旧中間層への関心はよわいのである。工場労働者(労働者階級)と商業者(旧中間層)の関係を考察する視点をもっていなかったといえる。

月島調査は「多数の熟練職工の団聚する地域」の調査、労働者の「結合の力」を育成することを目的とした調査であったから、この限界は当然のものかもしれない。高野は「私は飽まで労働者の自助的方法に依って(中略)労働問題を解釈して行かねばならぬものであるという立場を常に維持して動かぬ者であります。」(『社会政策論叢』第五冊「労働保険」)と述べており、研究・関心の所在はあくまで労働者階級にあった。

1918~20年の調査時点で、娯楽とくに児童の娯楽までふくめて調査が実施されていることの意義は大きい。そのような研究関心が反映されている第21図「駄菓子屋、ミルクホール分布図」は秀逸である。しかし、旧中間層への関心は欠けている。なぜ、旧中間層への関心が欠落してしまうのだろうか。日本の近現代社会の研究において、このような視点が欠落してしまうことの意味を、さらに権田保之助の娯楽研究の系譜をたどりながら、考えてみよう。

## 5. 権田保之助の民衆娯楽研究と特徴

### 5-1 研究経歴と「月島調査」の娯楽研究の特徴

権田保之助の民衆娯楽研究の独自性については、すでに評価が定まっている [吉見 1987], [佐藤 1996]。

まず最初に、権田の研究経歴を確認しておこう。1887年生れの権田は、早稲田中学を卒業後、東京外国語学校独逸語学科で学び、東京帝国大学哲学科選科（美学専修）に進んだ。学業をおえたのち、私立独逸協会学校で教員として勤務したのち、東京帝国大学法科大学助手をつとめていた。このとき、内務省囑託として「月島調査」に関わった。「月島調査」終了後、大原社会問題研究所所員となり、理事もつとめた。戦後は、日本放送協会常務理事にもなり、1951年に亡くなった。

この間におこなった主要な調査に、東京市活動写真調査（1917）、東京市寄席興行調査（1918）、月島調査（1918-1920）、月島熟練工家計調査、小学校教員家計調査）、倉紡工場労働者娯楽調査（1920-1922）、浅草調査（1921）、娯楽業従業者調査（1922）などがある。また主要な著作は、「東京市に於ける労働者家計の一模型」（1923）、「東京に於ける少額俸給生活者の一模型」（1924）、『民衆娯楽論』（1931）、『国民娯楽の問題』（1941）などである。

権田の研究は1910年代にはじまり、初期段階の中心テーマは家計調査・生活研究であった。高野は1916年に「東京に於ける二十職工家計調査」を実施している。権田は高野の薫陶をうけ、研究の初期段階ではその影響のもとをつよく受けている。労働者の生活を重視する研究視角であった。

その一方で、権田自身の関心を反映した研究にも着手している。それが東京市活動写真調査（1917）、東京市寄席興行調査（1918）である。このような労働者生活への関心と、民衆娯楽研究への関心がミックスして、権田の独自性が発揮されたのが、「月島調査報告」の「第二編第15章 労働者と娯楽」、「第16章 労働者儿女と生活」であった。つまり、「駄菓子屋」

調査は、権田の民衆娯楽研究の一環であった。

「月島調査」終了後、権田の研究は活動写真研究へと重点が移り、独自の研究へと深化していった。労働者の生活向上にともない、出現した「大衆」により受け入れられる娯楽とは何かという関心がベースとなっている。それが映画研究、テレビ研究などの、現在でいうところのメディア研究に発展していった。民衆の生活における娯楽の意味を追究し、メディアを切り口として、労働者生活から大衆の生活へと分析対象を移行させていったのである。

権田の「月島調査」における娯楽研究は、上記のような研究系譜の途上にあるものであった。「第15章 労働者と娯楽」は大人の娯楽調査で、調査項目は西仲通りの業種別商店数、露店種別数・顧客数、通行人数、飲食店の顧客数・消費金額、寄席入場者性別・入場者数別、年齢別、飲酒状態、新聞購読などである。「第16章 労働者儿女と生活」は児童の娯楽調査で、調査項目は駄菓子屋数、遊戯、興行物、労働者儿女の趣味性、理想である。どちらも集客状況の計量的把握がメインで、娯楽享受者側を重視した調査となっている。娯楽提供者への関心は欠落している。

権田の研究歴のなかでは、「月島調査」以外に、児童の娯楽に焦点をあてた研究・調査は見当たらない。ゆえに、「月島調査」で実施された「労働者儿女の娯楽調査」は、権田の民衆娯楽研究のなかでも、特異かつ独自なものである。

## 5-2 娯楽提供者への視点

後年、権田は娯楽提供者への関心を多少は示している。『娯楽業者の群』(1923年)である。これは接客業の従業員をルポルタージュ風に記述したものである。対象となったのは、水商売・客商売の女(芸者、娼妓、私娼、料理店の女中、待合の女中、カフェーのウェイトレス、蕎麦屋・汁粉屋の女中、宿屋と下宿屋の女中)、芸人(喜劇俳優、落語家、講釈師、義太夫語り、浪花節語り、オペラ俳優、手品曲芸師、安来節芸人、活動説明者、活

動女給）、遊芸の師匠（唄い物、踊、琴、謡い、生花、茶の湯、尺八、琵琶、洋楽、ダンス）、大道芸人（「流し」の人々、角兵衛、猿廻し、大道尺八、演歌者）などであった。

独自の研究が深まり、娯楽提供者に関心をいだくようになったのだろう。ただし、視点としては、娯楽業の従業員等についての記述であり、娯楽業の経営者の調査ではない。かつ、ここでの記述は「江戸趣味」、つまり前近代から継承された娯楽の提供者に重点がかかっている。これは、権田が時代の変化にともなって、消えていく娯楽と、隆盛していく娯楽に関心をもっていたことを反映している。前近代からの娯楽の提供者は、消えていく娯楽の担い手として書きとどめられている。権田は「月島調査」でも、寄席の集客状況を調査していた。月島の労働者生活において、寄席という伝統的娯楽が維持されているのか、消えつつあるのかという関心がベースとなっている。権田の民衆娯楽研究のテーマは「娯楽の消長」に深化していった。

### 5-3 「娯楽の消長」「近代都市娯楽」というテーマ

権田は著作のなかで「娯楽の消長」にしばしば言及している。権田は当時における「都市三大娯楽」として、映画興行、劇場興行、寄席興行をあげている。三大娯楽には消長の萌芽があらわれていた。

「寄席衰微の動因には、或る社会経済的な大きな力が横わって<sup>マ</sup>い、史的根拠があることは言うまでも無いが、其外面的に現われて格段に目立つ事柄は「活動写真」の出現であった。「活動」が興行として頭を擧げ出して来た明治末期から大正初頭に、「寄席」と「活動」の争の火蓋が切られ、寄席不振のスタートが切られ、かくて「活動」の進出は「寄席」の退却を結果しつつ、大正の時代は移り行<sup>マ</sup>いたのである。（中略）「寄席」は衰微する。少くとも古い形式の「寄席」は益々振わなくなる。寄席不振の真因が仮令深い所に横わっているにせよ、「寄席」に取って矢張り憎いは「活動」であり、「ラジオ」である。（中略）然かし此の「寄席」の世界に住む人の中にも、

早く已に此の『江戸趣味』の呪文の御利益が甚だ薄いことに気が付いた人があった。」(「寄席の没落と更生」『民衆娯楽論』『権田保之助著作集』第2巻) [権田 1931 : 247-248]

権田にとって、寄席興行は衰微しつつある娯楽であった。隆盛になりつつあるのは、映画(活動写真)で、「新しき民衆の生活意識に根拠した『民衆娯楽』を最もよく代表しているもの」であった。権田のこのような見解がテレビへの関心、戦後の日本放送協会常務理事への就任につながっていると思われる。

また、権田の研究関心は、一貫して「民衆娯楽」研究にあった。権田にとって、「民衆」とはどのような人々をさしていたのだろうか。

「現代社会経済生活の必然の所産である新概念としての「民衆娯楽」は、其の発祥の地を先ず都市生活の間に発見し、其の構成と育成とを都市居住の無産階級者の生活様式と生活意識との裡に所期し得たことは、既に攻究して得たる結果である。」(「都市民衆娯楽の消長と推移」『民衆娯楽論』『権田保之助著作集』第2巻) [権田 1931 : 291-299]

権田にとって、民衆とは「新興無産階級」のことであった。ここに「職工家計調査」,「月島調査」以来の、高野の薫陶をうけた労働者生活への関心が貫ぬかれていることをみることができる。

権田にとって、民衆娯楽の消長は、労働者生活の変化、資本主義の変化を反映したものであるからこそ、研究するに値するのであった。権田は「近代都市娯楽」の顕著な二つの特徴について言及している。特徴の1つは「近代都市娯楽の重心は、興行物的娯楽に横わるということ」であった。近代都市の生活は、「娯楽享楽者」と「娯楽供給者」との明確な分化をもたらす。その結果、職業としての娯楽供給が確立する。娯楽は常設的な設備で、興行物的に提供されようになる。もう1つは「近代都市娯楽の供給組織は企業化する」であった。都市においては「娯楽の大量需要」がおり、「廉価供給の要求」が生じる。それに対応して、「娯楽供給組織の大企業的経営」が出現する(「都市民衆娯楽の消長と推移」『民衆娯楽対策』『民衆娯楽



論』『権田保之助著作集』第2巻）[権田 1931 : 291-299, 319-325]。

権田は「民衆」と「娯楽」の関係について、次のように考えていたといえるだろう。寄席興行などの「江戸趣味」の娯楽は縮小する。その一方で、「新興無産階級」である民衆の生活様式・生活意識は変化しつつあり、「活動写真」を主流の娯楽として成長させる。大衆に娯楽を提供するため、活動写真等の娯楽は資本主義化し、大規模な資本的経営によって提供されるようになる。このように権田は、民衆の生活と、都市化、資本主義化の関係を的確にとらえ、テレビをはじめとするメディアの成長を的確に予測していた。

権田がのちに日本放送協会常務理事に就任したことにもあらわれているように、「娯楽の消長」というテーマのなかでも、権田の関心は隆盛となる娯楽のほうをより重視していた。消失しつつある「江戸趣味」の娯楽提供者（小サービス提供者）から、主流になりつつある「活動写真」などの新興興行物の資本的経営者へという切り口で、変化のありようをとらえる研究視角である。

「消長」の「長」を重視する視点は、「消」についてはさほど関心を示すことがなく、詳細な調査はなされない。「消」については、一般的な「消えていく中間層」という視角でとらえがちになる。都市中間層の状況を詳細に検討すると、戦後も都市中間層への流入者がおり、再生産がおこなわれていた。このような「消」についてのディテールは看過されてしまう。また、民衆の娯楽を別の側面からみると、マスメディアにのりにくい大衆の芸能の担い手は、いつの時代においても再生産されていた。都市下層と境界があいまいな、ニッチな存在であった。民衆娯楽研究として、このような都市下層的存在の人々に担われる芸能の意味を追究する研究の方向もありえた。権田の場合は、その方向ではなく、大衆化、資本主義化する娯楽につよく関心をもって、研究をすすめていった点に特徴がある。労働者生活へ一貫した関心をもってしたが、「消」の方向は「消えていく中間層」という一般的にとらえかた以上に深化することはなかったといえる。「月島調査」における娯楽提供者（中間層）への関心の欠落は、権田の後年の研

究と通底している。労働者生活研究へのつよい関心、中間層への関心の欠落は、権田だけにとどまらない。第21図「駄菓子屋、ミルクホール分布図」をたどっていくと、社会科学分野における中間層研究のこのような特質がうかびあがってくる。

## 6. むすび —「月島調査」データ2次分析と旧中間層研究の再考

「月島調査」の娯楽研究には、権田の後年の娯楽研究への萌芽、独自性を多々見出すことができる。子どもの娯楽に関心をもち、調査を実施したことの独自性は高く、「駄菓子屋、ミルクホール分布図」は秀逸で、この1枚の社会地図があることの意義は大きい。「子どもの娯楽」研究、「駄菓子屋」分布図は、多様な研究が可能であったことを感じさせる。ただし、娯楽の提供者に対する視点は弱かった。後年の研究で、若干の関心は抱くことはあったものの、この点を十分に深化させることはなかった。これは、権田の娯楽研究の関心が「娯楽の消長」、新興の活動写真、資本的経営者に集中していったことと関連している。

「月島調査」の視点は、労働者階級に着目するものであり、旧中間層への関心はほとんどみられない。旧中間層が消失し、労働者階級が成長するという前提の調査では当然のことであつたらう。当時の時代状況、社会科学の研究段階を反映した、歴史的限界があつたといえるだろう。その分析視角は、権田の後年の研究にも受け継がれ、権田の民衆娯楽研究、活動写真研究は、この枠組のなかで深化していったものである。民衆娯楽研究は、あいまいで、ニッチな社会層へ接近しやすい研究領域だと思われる。しかし、権田の研究経過は、「労働者」対「資本家」図式につよくとらわれた。これは、旧中間層に対する視点を欠落させる傾向があつた日本の労働者研究の特質をあらわしている。

都市居住者の生活世界を考えると、大衆芸能つまり小規模、零細資

本で行われている娯楽の担い手は、旧中間層、または都市下層的存在の社会層であった。いつの時代にも一定数存在しつづけていたと思われる。つまり、民衆娯楽の担い手を多様な視点からみようとした場合、このような存在の人々に着目し、旧中間層への流入者は常に一定数存在し、再生産がおこなわれていたことに気づく可能性はあった。しかし、権田の研究枠組に、このようなニッチな存在はのりにくいものであった。

実際のところ、旧中間層には、都市下層との差異もあいまいなほどの社会層もふくまれており、都市の旧中間層の内実は非常に多様であったと思われる。中間層に対する研究アプローチは、新中間層と旧中間層の差異や消長に着目するアプローチもある。しかし、それとは異なる方向、旧中間層のなかの、あいまい・多様な存在に着目するアプローチもある。このような研究の方向は、旧中間層の変容・再生産の過程の再考や、現在の格差社会論の考察にも資するであろう。長いタイムスパンで、地域社会構造の変容の過程をダイナミックにとらえることも可能にする。

本稿は、既存の「調査データ」の2次的利用・2次分析の方法を検討することを目的としていた。「月島社会地図」第21図の「駄菓子屋、ミルクホール分布図」の2次的利用の実例を示すことによって、日本における中間層研究の再考、日本の近現代の社会科学分野における労働者生活研究の分析視角の見直しにもつながることを、本稿は示した。質的調査データの2次的利用・2次分析は多様な可能性をふくんでいる。2次的利用・2次分析を調査方法の1つとして位置づけ、分析実例を積み重ねていくことは、社会調査方法の進展に資すると思われる。

## 註

- 1) 武田尚子, 2008b, 『質的調査データ [Ray Pahl 'Sheppey Studies'] の2次分析—1980年代英国の格差拡大プロセス: 最貧困は誰か?—』, The Great Britain Sasakawa Foundation, 2007 Grant Project Report. 「英国の質的調査データ [レイ・パール "シェッピー・スタディーズ"] の2次分析—1980年代英国の格差

- 拡大プロセスの分析視角と現代的意義一」, 広田康生・町村敬志・田嶋淳子・渡戸一郎編著『先端都市社会学の地平2』ハーベスト社, 近刊。
- 2) その代表的なものは, 横山源之助『日本の下層社会』, 教文館, 1899年である。
  - 3) [内務省衛生局 1921=1970: 115-133]
  - 4) 詳細な考察は, 武田尚子『もんじゃの社会史』青弓社: 2009を参照。

## 参考文献

- 有末賢, 1999, 『現代大都市の重層的構造』, ミネルヴァ書房。
- Corti, L., Thompson, P., 2007, 'Secondary analysis of archived data', Gubrium J. F., Silverman D., (ed) *Qualitative Research Practice*, SAGE Publications; London
- 権田保之助, 1974, 『権田保之助著作集第1巻 民衆娯楽問題・民衆娯楽の基調』, 文和書房。
- , 1974, 『権田保之助著作集第2巻 娯楽業者の群・民衆娯楽論』, 文和書房。
- , 1975, 『権田保之助著作集第3巻 国民娯楽の問題・娯楽教育の研究』, 文和書房。
- , 1975, 『権田保之助著作集第4巻 主要論文』, 文和書房。
- 川合隆男, 1981, 「月島調査」再考察(1)(2・完) —わが国近代都市労働者生活の形成と「月島調査」, 『法学研究』54(8): 1439-64, 54(9): 1571-1603。
- , 1982, 「愛児のために何を為すか 星野鉄男」, 『近代日本の生活研究』, 光生館: 127-149。
- , 2004, 「社会踏査を試みた月島調査—近代日本における社会調査方法の模索と月島調査」, 「月島調査再考察—わが国近代都市労働者生活の形成と月島調査」, 「月島調査について」『近代日本における社会調査の軌跡』, 恒星社厚生閣: 97-129, 131-197, 395-418。
- 草野滋之, 1990, 「わが国における労働者文化論に関する一考察—大正期における権田保之助の所論を中心として」, 和光大学『人文学部紀要』25: 195-202。
- 京橋月島新聞社編, 1940, 『月島発展史』, 京橋月島新聞社。
- 松尾浩一郎, 2003, 「見る社会調査—写真にうつされる地域社会と人間」, 第21回日本都市社会学会大会自由報告資料。
- 三好豊太郎, 1980, 「月島調査の成立とその経過について」, 『明星大学研究 紀要人文学部』16: 31-48。
- 内務省衛生局, 1921, 『東京市京橋区月島に於ける実地調査報告第一輯』(1970『生活古典叢書第6巻 月島調査』光生館に再録—『第一輯』第一冊のみ)。
- 日本人と娯楽研究会編, 1982, 『権田保之助研究』創刊号。

- , 1983, 同 第2号.
- , 1984, 同 第3号.
- , 1985, 同 第4号.
- 佐藤健二, 1992, 「都市社会学の社会史—方法分析からの問題提起」, 『都市社会学のフロンティア1 構造・空間・方法』日本評論社: 151-215.
- , 1996, 「方法を読む—社会調査の水脈をたどりながら」, 『都市の解読力』勁草書房: 209-254.
- 関谷耕一, 1970, 「解説 高野岩三郎と月島調査」, 『生活古典叢書第6巻 月島調査』光生館: 1-44.
- 園部雅久, 2001, 『現代大都市社会論: 分極化する都市?』, 東信堂.
- 霜野寿亮, 佐藤茂子, 田中重好, 有末賢, 1981, 「「月島調査」の周辺とその後」, 『法学研究』54(8): 1484-1528.
- 杉座秀親, 1990, 「大正期と余暇社会学の萌芽—権田保之助の余暇論」, 日本大学『社会学論叢』107: 30-47.
- 高野岩三郎, 1921, 「第一編 総説」, 内務省衛生局, 『東京市京橋区月島に於ける実地調査報告第一輯』.
- 高野岩三郎編, 1933 『本邦社会統計論』改造社.
- 武田文祥, 1982, 「囚われたる民衆と社会科学 高野岩三郎」, 『近代日本の生活研究』, 光生館: 44-62.
- 武田尚子, 2008a, 「グローバリゼーションとローカリティー—東京・月島のもんじゃの事例」, 白水繁彦編著『移動する人々・変容する文化』, 御茶の水書房: 141-161.
- , 2008b, 『月島ともんじゃの展開史』, *The Comparative Analysis of Community, Family and Work in the UK and Japan Part1, The Daiwa Anglo-Japanese Foundation, 2007 Small Grant Project Report*, pp. 1-88.
- 2008c, “Mega-city and Mega-projects: The impact on a Working-Class Residential Area in Greater Tokyo”, *Journal of Musashi University Research Center*, No. 17, pp. 65-77.
- , 2009, 『もんじゃの社会史—東京・月島の近現代の変容—』青弓社.
- 寺出浩司, 1982a, 「労働者文化論の形成と変容」, 『近代日本の生活研究』, 光生館: 178-199.
- , 1982b, 「月島調査報告書第二輯『労働者及教員家計調査報告』—権田保之助手稿についての一検討」, 『三田学会雑誌』75(6): 94-108.
- 月島地区築島100周年記念事業実行委員会, 1992, 『月島百年史』.
- 宇野弘蔵, 1970, 『資本論五十年(上)』法政大学出版局: 158-175.
- 吉見俊哉, 1987, 「盛り場と民衆娯楽—権田保之助」, 『都市のドラマトゥルギー』, 弘文堂: 36-59.